

IV-8 河川景観の保全について

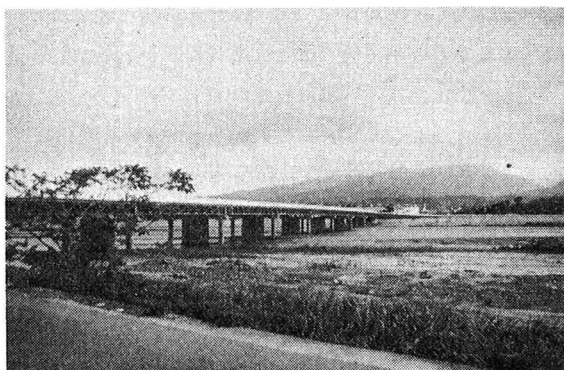
東京大学大学院 学生会員 窪田 陽一

□ はじめに —— 実体(物質)によって構成され、人間の活動の場となり、環境の一部として機能する空間が、視覚系を介して人間に知覚された像を、景観と定義する。即ち、景観とは環境(生存の場)に関する視覚的情報である。また、環境は実体や空間の相互の機能連関構造に従って構成されており、それ故に景観の相違は機能連関構造の相違と対応して現前することになる。更に言えば、景観への人間の関わり合いは、最終的には過去の体験の記憶等を含めた総合的な感覚によって形成されるものであり、環境に対する一般市民の評価は全人格的な構造を持っているものなのである。従って、環境問題の解決とは全人格的な評価に耐え得る人間環境の形成と同義な側面を有していると考えることが出来る。そのためには、環境の自然的基盤や歴史的経緯に対する考察が不可欠となってくるであろう。先には、大都市における河川の閉塞的な状況に対する反省である親水機能論¹⁾を依り所に、その改善策としての一般的な計画手法を検討したが²⁾、ここでは上記の観点から、歴史的都市河川及び自然的河川の代表的なものをケース・スタディの対象として選び、空間構成・景観構成の面から、人間環境の保全・向上に対する意義について議論を試みることにする。

□ 河川空間の景観的效果 —— 景観は実体と人間との間に空間があるが故に現前するものである。河川はオープン・スペースとして扱われているが、堤内地の地上のオープン・スペースとは極めて異なる性格を有するものであり、区別して河川空間と呼ぶことにする。この

神奈川県・小田原市・酒匂川 ▼

河川空間は、流水・堆積物・植生・人工構造物等から構成されており、人間に活動の場を与えると同時に景観を現前させる場となるものである。個々の構成要素の景観的效果について詳述する余裕はないが、例えば右の写真の様に、橋梁や対岸(特に遠景の山なみ)といった主要な景観構成要素をディスプレイする、即ち対象との間にスケールに応じた距離(「ひき」)を与えて引き立たせる効果を持っていることがわかる(この写真の視点は堤防の上にある)。同時に、対岸の堤防は対岸堤内地の建築物等を視覚的にさえずり、遠景の山なみを手前に引き寄せて見せる(伝統的借景庭園の築地塀・刈込みと同様の)効果を有している。より規模の小さい、特に都市部の河川においては構相は異なってくるが、流路方向上流に視線を投じた場合に遠景に山なみを得ることが出来る場合もある。送電塔や樹木、高層建築物は水平に広がりとかく単調になりがちな河川景観に垂直方向の動きを加える要素であり、ランドマークとなって、水面とともに、地理的な位置の認知に重要な役割を演じている。



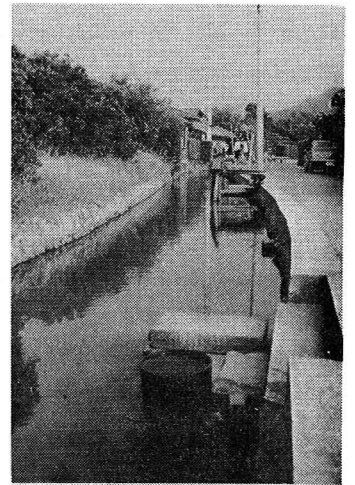
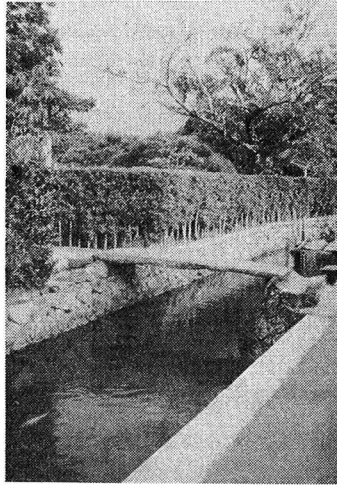
山口県・萩市・阿武川 ▼



□ 校市・藍場川 —— 生活環境化した人工河川

(Case Study I)

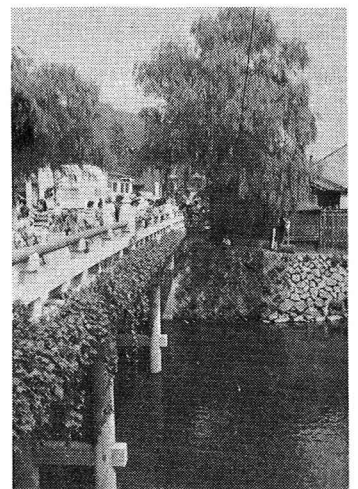
阿武川が松本川と橋本川に分流する地点より松本川寄り下流から取水されているこの人工河川は、嘉永年間（1824-1844）の地図と比べても全く同じ所を現在も流れ続けている。幅員は広い所で4m、狭い所で2m位であり、水深も50cmを越えない。元来農業用水路であったものが、現在までの間に生活環境の一部として使われるようになり、魚の飼育、釣り、シジミ採取、水遊び等の場として付近の住民に親しまれている。伝統美観保全地区に指定されていることもあるが、空間構成も昔のままである。住居の生け垣、石橋、洗い場等が静かな落ち着いた景観を住み込んでいる。これは流速が小さいことも一因である。更に、住民自ら鯉を放流し、維持管理にも積極的であるという。周辺の家々にはこの川から水を引いた洗い場や池があり、極めて生活に密着しているのである。この様に生活環境の一部として開水路を設けることは、例えば環境衛生の面でも効果のあることであろう。景観の質を維持・向上させることが生活環境の維持・向上につながり、環境との情緒的関係を良好に保つことができると考えてよいのではないだろうか。そのためには、水面との接触が容易である（藍場川の場合水面への落差が小さい）ことも一つの条件となろう。



□ 津和野町・津和野川 —— 都市と自然の媒介的空間

(Case Study II)

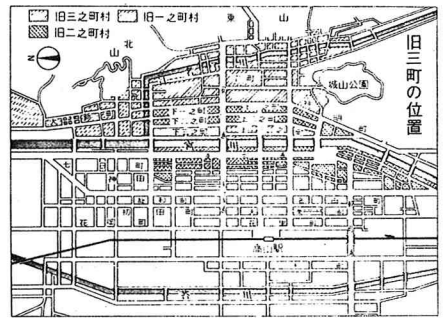
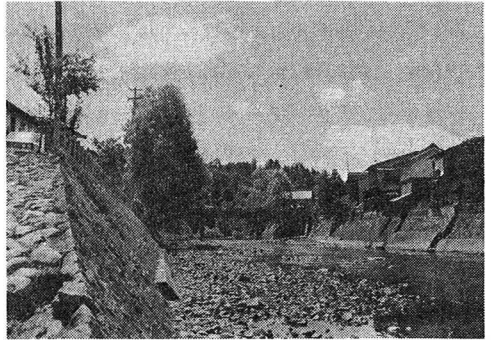
町内を流れる用水路に鯉を放流していることが有名であるが、津和野川にも多数の魚影が見られる。Case study IIIの高山市・宮川も同様であるが、(小さいとは言え)都市の中を流れている河川の水が透明でしかも魚群が見られるということは、大都市からの旅行者には不思議であり、驚きの声が絶えない様子であった。これは都市という人工的な空間の中に自然の生態系そのまゝの状態が入り込んでいるからであり、大都市においてはちや見られない景観なのである。しかし、流域の水収支と水質が河川の生態系に適合するならば、津和野川のような状態は他の都市にも存在し得るものであろう。その様な時、河川空間は都市と自然を視覚的に媒介する空間となる。水面へ降りることが容易ならば更に理想的である。また、右の図の様に、どの都市においても歴史的シンボルはあるものがあるが、それらの位置の認知は、道路や鉄道だけでなく、河川を主掛りとして行なわれることが多い。一つには河川そのものがシンボリックに記憶に残りやすい空間であること、また一つには個々に特有の屈曲等の形態を有した変化に富む景観を呈するからであると考えられる。これらは河川空間特有の性質であるといえてよいだろう。



□ 高山市・宮川 —— 都市空間の構成要素

(Case Study III)

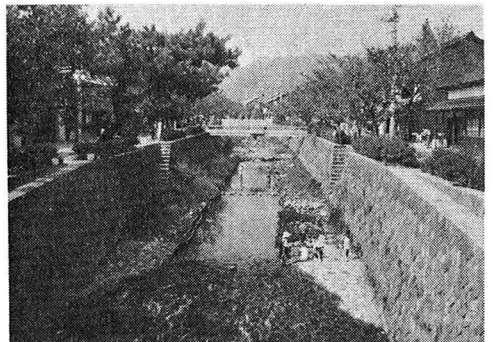
都市や集落が河川の周囲に発生した理由は今更述べるまでもない程明白なものであるが、河川が空間としてどの様に都市を規定してきたか、あるいは逆に都市の空間構成上の必要からどの様な空間構成の変容を求めてきたか等の問題に対する体系化された研究は未だ行なわれていない。また新都市の建設等に際して河川空間を効果的に利用した例も極めて少ない。この様な観点から岐阜県高山市・宮川を考察してみると、江名子川と宮川の合流部付近に展開するこの旧城下町が、いかに河川を媒介として町並を構成してきたかを知ることができると。即ち、Y字型の水面に対してそれを囲み込むような形で一之町、二之町、三之町があり、各々が独自のコミュニティを形成していた。特に二之町村は宮川の西岸一帯に広がり、東岸においては用水路を引いて、材木商や挽屋が流水を利用していただようである。このため、現在の河岸を見ても、各家の間の路地から水際まで降りられるような石階段が流路方向に対して直角に作られている。近年に都市化した区域は図の下側の部分であり、宮川との直接的な関係はないが、この様な発展形態をとったのも、地形上の制約と江名子川・宮川を中心とした歴史的な都市空間構成に帰因するものと考えることができると。



山口県・山口市・一之坂川

□ 歴史的都市河川の空間構成 —— 以上三つの例によって

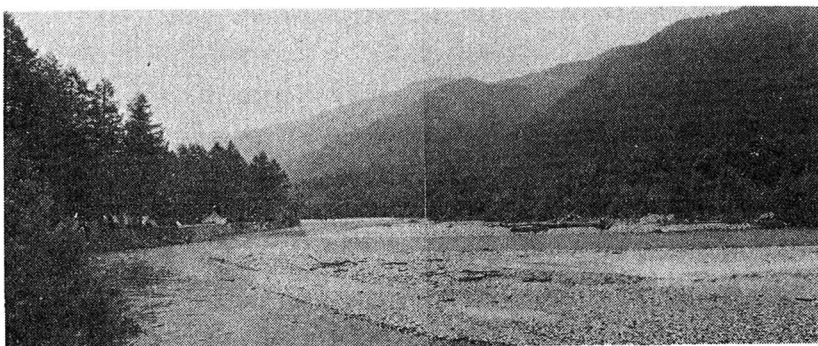
歴史的都市河川 —— 明治以前の河川景観が比較的良く保全されている都市河川 —— の様々な側面についてごく簡単に触れてみた。ここに掲げた都市は現在では観光地としていずれも有名な所であるが、一昔前まではどこにでもある地方小都市に過ぎなかったものが多い。近年になってこれらの都市が俄に注目されたのは、現代都市では破壊した近隣関係の存続の他に、町並や周辺の自然との関係が極めて調和的な部分を残しているからであろう。しかも、いずれの都市においても河川に対して常に accessibility が高く、かつ河川景観の visibility が高いことによって、人間生活と自然との関わりを日常的に体験を通じて確認してゆくことができたのである。これは歴史的都市河川の空間構成に忠実に反映されている。即ち、河川と人間生活との関係が空間構成として具体的されているのである。そして、その様にして形成された河川景観は、現代大都市の排水的・下水路的な都市河川とは全く異なった様相で観光客の前に立ち現れてくる。透明な水や魚影のみならず、水際へ降りられる石段や石垣護岸、浅く広く流れる水は東京や大阪では見ることができないものである。基本的な断面形状には大差はないが、周辺の生活環境との空間的な関係が全く異なっているのである。この様な歴史的な空間構成が残っている河川は全国各地に散見される。葛根県益田市郊外の益田川には高山市宮川に近い形の構成があり、河川に降りてゆける真木戸を有する家もある。京都市の白川や高瀬川は萩市の鹽場川の様子水面への落差の小さい小河川である。上の写真の山口市・一之坂川は、住宅地の環境形成のために特別の景観設計を行なった例であるが、歴史的景観は失われたという。



□ 上高地・梓川 —— レクリエーション・スペースとしての自然的河川空間

(Case Study IV)

景勝地と呼ばれる地域の軸として河川が重要な役割を果たしている例は枚挙に暇がない程数が多い。このことは、河川工事（特に護岸・堤防の法面工事）に際して景観的な配慮を必要とする地域が多いことを意味している。河岸が岩層から成る溪谷（埼玉県長瀬など）は別として、侵食から永際を保護する必要がある区域においては材料と工法の選択及び維持管理が重要な鍵となる。梓川はその成功した例と言ってよいであろう。二つの護岸は全面的に蛇かごを採用し、河床や砂礫堆との類同がはかられており、一部では植生も入って、ほぼ完全に自然景観の中に融和し、景観保全の目的は達せられている。しかも、法勾配を緩くすることにより、永際まで降り、安全に水に接することができるようになっている。このようなレクリエーション・スペースとしての価値を有する河川空間において重要なことは、永際の造成処理の他に、水位の変動（特に夏期）及び土砂流出による景観の変化である。前者は、ダム貯水池においては水位低下による裸地の露出として、一般河川においては増水による危険の増大として問題とされ、後者は、河床の上昇によるイメージの低下等の形で議論されることが多い。いずれにせよ、これらはみな景観として認識された地域との不調和が問題となるのであり、単に河川区域内における技術的処理の範囲で扱い得る事柄ではない。従って河川景観の保全計画は後背地の景観保全と一体のものとして、総合的に考えられるべきであろう。



長野県・上高地・梓川 ▲

□ おわりに —— 各地におけるケース・スタディの中から代表的なものを選んで、河川景観の保全に関する議論を展開してみたが、流域や地域の特性を加えたより深い考察の必要性を痛感している。また、工法や構成技法の関連も重要であり、特に石垣護岸の保全方法は景観的に言っても考えられてよい事柄であろう。更に、本稿では触れなかったが、水質は根本的に重要な要因であり、河川景観の質を基本的に左右するものである。即ち、河川景観は流域の土地利用と本質的に関わっている問題なのである。

□ 参考文献

- 1) 例えは：山口高志：都市河川研究の現況と問題点 土木技術資料 '74. 1
- 山本弥四郎・石井昭夫：都市河川の機能について 第26回土木学会年次学術講演会講演集 II-151
- 2) 中村良夫・窪田陽一：河川空間の計画手法に関する研究 第30回土木学会年次学術講演会講演集 IV-161
- 3) Roy Mann : Rivers in the City DAVID & CHARLES 1973
- 4) R. Burton Litton, Jr, et al : An Aesthetic Overview of the Role of Water in the Landscape 1971
- 5) 中村良夫：土木空間の造形 技報堂 1967
- 6) K. リンチ (山下達三・窪田玲子訳)：都市のイメージ 岩波書店 1968
- 7) 樋口忠彦：景観の構造 技報堂 1975
- 8) 梅根忠夫・多田進太郎・上田篤・西川幸治：日本人の生活空間 朝日新聞社
- 9) 都市デザイン研究体：日本の都市空間 彰国社 1968
- 10) 彰国社編：都市空間の計画技法 彰国社 1974